

地域デザインに必要とされるスキルの養成に関する
複数科目における実践（その2）

——「ソーシャルスキル演習」と「ワークショップ演習」を通じて——

Practice of Cultivation of Skills for Regional Design in Multiple Classes (II):
Social Skills and Seminar on Workshop

若園 雄志郎¹・白石 智子²

WAKAZONO Yushiro, SHIRAISHI Satoko

¹宇都宮大学地域デザイン科学部准教授

²宇都宮大学地域デザイン科学部准教授

地域デザインに必要とされるスキルの養成に関する 複数科目における実践（その2）

——「ソーシャルスキル演習」と「ワークショップ演習」を通じて——

Practice of Cultivation of Skills for Regional Design in Multiple Classes (II):

Social Skills and Seminar on Workshop

若園 雄志郎¹・白石 智子²

WAKAZONO Yushiro, SHIRAISHI Satoko

宇都宮大学地域デザイン科学部においては「専門科目は100%アクティブ・ラーニング」としており、授業内容や形式に応じて最も効果的な手法をそれぞれの授業や演習等で取り入れた上で実施している。本稿は、その中でも「ソーシャルスキル演習」と、最も関連すると考えられる「ワークショップ演習」の比較検討を継続して行うものである。どちらの演習も地域における人との関わりや、そこでの主体形成と合意形成などを効果的に行うため基礎力・応用力を養成するものであるため、これらの演習を通じてそれらのスキルが相互にどのような影響を与えたか等について考察し、今後の課題について提示する。

キーワード：アクティブ・ラーニング、ソーシャルスキル、ワークショップ、合意形成、地域

I. はじめに

2016（平成28）年に設立された宇都宮大学地域デザイン科学部コミュニティデザイン学科は2019（令和元）年に完成年度を迎えた。これにより4年次までの全学年の学生が揃うこととなり、同時に各科目についても実施した上での改善や他の科目との連携について検討を行っているところである。

コミュニティデザイン学科の専門科目「ソーシャルスキル演習」（AL80¹、コミュニティデザイン学科2年次必修科目）についてはアクティブ・ラーニングの発展および新たな手法の開発のための基礎的な研究としての教育実践が報告された²。また、これと関連が深い「ワークショップ演習」（AL80、コミュニティデザイン学科および建築都市デザイン学科3年次必修科目、社会基盤デザイン学科3年次選択科目）に関して、関連する科目を適切に位置づけた上で学生の意欲や関心を引き出し、学問的・技術的に成長させていくことが重要であるという観点から、それぞれを受講した学生がどのような自己評価を行ったかについても報告されている³。

しかしながら、上記の報告は2016年度入学の1期生のみのものであるため、継続的に検討を行い、評価していくことが重要であろう。そこで本稿では、引き続き「ソーシャルスキル演習」と最

¹ 宇都宮大学地域デザイン科学部准教授 pontono@cc.utsunomiya-u.ac.jp

² 宇都宮大学地域デザイン科学部准教授 shiraishi@cc.utsunomiya-u.ac.jp

も関連が深い「ワークショップ演習」を取り上げ、2018年度に「ソーシャルスキル演習」を受講した学生が、2019年度に「ワークショップ演習」を受講し、どのような自己評価を行ったかについて報告する。今回分析の対象とするのはコミュニティデザイン学科の2期生（2017年度入学）であり、それを1期生の分析結果と比較検討を行う。

II. 授業の位置づけ

位置づけに関しては2018年度と変更はないが、授業内容に関しては若干の相違がある。そこで授業概要について、「ソーシャルスキル演習」を表1に、「ワークショップ演習」を表2に示す。「ワークショップ演習」の「社会・地域課題の解決へ向けて」の回次が2018年度と異なっているが、これは講師都合によるものである。

表1 ソーシャルスキル演習の授業概要

授業回	テーマ	内容
1	オリエンテーション	ガイダンス、グループ分け
2	テーマに沿った話し合い	初回プレゼンテーションに向けた議論、スライド作成等 ※授業外の時間も活用
3~5	プレゼンテーション①②③	毎回3~4グループによるプレゼンテーション、他の受講生および教員による評価
6	プレゼンテーションの振り返り	他グループや教員からのフィードバック、発表時の録画映像を活用した振り返り、数値評価
7	具体的なスキル①	比較・反論のスキル
8	具体的なスキル②	説得的・論理的な説明をするスキル
9	具体的なスキル③	リフレクションのスキル
10	テーマに沿った話し合い	グループ替え、再プレゼンテーションに向けた議論、スライド作成等
11~14	再プレゼンテーション①②③④	毎回2~3グループによる再プレゼンテーション、他の受講生および教員による評価
15	再プレゼンテーションの振り返り	他グループや教員からのフィードバック、発表時の録画映像を活用した振り返り、数値評価（グループと個人）、まとめと講評

表2 ワークショップ演習の授業概要

授業回	テーマ	内容
1	オリエンテーション	グループ編成（学科混成）、ワークショップに関する基礎的理解
2	ワークショップをデザインする①	全21グループで課題の設定とワークショップの枠組みの討議
3	ワークショップをデザインする②	各グループでワークショップのデザイン・進行案の確定
4・5・7	ワークショップをデザインする③④⑤	3グループを1ユニットとして、週ごとのローテーションで実際にワークショップを運営・参加・評価
6	社会・地域課題の解決へ向けて	模擬事例としての地域課題、ワークショップ事例の紹介
8	ふり返り・相互評価	他グループからの評価・教員からの指摘も参考とした自グループ内でのふり返りと数値評価

「ワークショップ演習」の概要に関して補足すると、第2回においては「自分たち（大学生）が当事者（利害関係者・ステークホルダー）となるような課題」を設定させた。これは、受講生が共感や理解を得にくい課題を設定した場合、テーマを理解するための時間が大幅に必要となるだけでなく、表面的な議論に終始してしまう可能性があるためである。また、2018年度は5-6限（12時50分から14時20分）に開講されていたが、準備や事前の打ち合わせ、事後のふり返りや片付けを余裕をもって行えるように、2019年度は5-8限（12時50分から16時00分）の時間枠を確保し、その中で90分間行うこととした。そのため、第2～5・7回については13時30分から開始とし、ワークショップ実施担当班はそれまでに手順の確認や使用機材・文具等を準備することとした。

Ⅲ. 学生による自己評価

既報^{2,3}の通り、「ソーシャルスキル演習」および「ワークショップ演習」では、授業目標に対応する観点について、授業終了時に個人の振り返り作業を行っている。その中で、両科目の関連、接続を意識した自己評価項目が設定されており、2019年度についても同一内容で実施した⁴。

表3に「ソーシャルスキル演習」、表4に「ワークショップ演習」の振り返りの観点と数値評価項目を示す。1期生（2017年度にソーシャルスキル演習、2018年度にワークショップ演習を受講）と2期生（2018年度にソーシャルスキル演習、2019年度にワークショップ演習を受講）における、各数値評価項目の平均および標準偏差もあわせて示す。

表3 ソーシャルスキル演習 (2年次科目)

授業終了時点における個人としての振り返りの観点と数値評価項目

【再プレゼンテーションについての個人の振り返りの観点】		
<ul style="list-style-type: none"> 事前の話し合いにおいて、自分はどのように議論や合意形成のプロセスに寄与できたと思うか？初回と2回目についてそれぞれ振り返り、それを基に、2回目にどのような点で自分として向上が見られたか。 		
<ul style="list-style-type: none"> 今後に向けた自分の課題と、その解決のために必要な知識や技能にはどのようなものがあるか？また、それらを獲得するために、今後自分として、具体的にどのような取り組みが可能か。 		
【数値評価項目】 ※初回から再プレゼンテーションにかけての変化についての個人評価を、-1 (やや後退)、0点 (変化なし) ~10点 (非常に向上した) で評定		
	1期生 (2017) 平均 (SD)	2期生 (2018) 平均 (SD)
<事前の話し合いについて> <ul style="list-style-type: none"> 様々な視点から、たくさんの意見 (アイデア) を出すこと 出てきた意見について、複数の視点から議論すること 議論を通して、合意形成をすること 	5.00 (2.33) 4.76 (2.16) 5.76 (3.23)	4.73 (2.83) 4.40 (2.66) 5.15 (2.78)
<プレゼンテーションの準備について> <ul style="list-style-type: none"> 内容のわかりやすさについて検討すること 異なる意見の人にも説得力をもつ論理的な構成について検討すること プレゼンテーションの内容について自分が十分理解すること 	4.72 (1.99) 4.63 (2.01) 6.65 (3.12)	4.29 (2.67) 3.65 (2.38) 5.46 (3.21)

表4 ワークショップ演習 (3年次科目)

授業終了時点における個人としての振り返りの観点と数値評価項目

【ワークショップデザインについての個人の振り返りの観点】		
<ul style="list-style-type: none"> 事前の話し合いにおいて、自分はどのように議論やワークショップデザインのプロセスに寄与できたと思いますか？ 		
<ul style="list-style-type: none"> 今後に向けた自分の課題と、その解決のために必要な知識や技能にはどのようなものがありますか？ 特に、今回のような「話しやすい」テーマではなく、人権問題や利害が衝突する景観問題などといったテーマを想定して記述してください。また、それらを獲得するために、今後自分として、具体的にどのような取り組みが可能か述べてください。 		
【数値評価項目】 ※以下の項目についてどの程度できていたか、受講前と現時点（第8回）を比較して、0点（まったくできていない）～10点（十分できた）で自己評価		
	1期生 (2018) 平均 (SD)	2期生 (2019) 平均 (SD)
<事前の話し合いについて> <ul style="list-style-type: none"> 様々な視点から、たくさんの意見（アイデア）を出すこと 	6.54 (1.91)	7.31 (1.37)
<ul style="list-style-type: none"> 出てきた意見について、複数の視点から議論すること 	6.50 (1.75)	7.02 (1.58)
<ul style="list-style-type: none"> 議論を通して、グループとしての合意形成をすること 	7.70 (1.45)	7.52 (1.85)
<ワークショップの準備について> <ul style="list-style-type: none"> 展開や組み立てについて、複数の参考図書・資料で検討すること 	4.50 (2.36)	4.73 (1.99)
<ul style="list-style-type: none"> 内容・テーマのわかりやすさについて検討すること 	7.70 (1.30)	7.46 (1.41)
<ul style="list-style-type: none"> 多様な意見への配慮がある構成について検討すること 	6.61 (1.55)	6.64 (1.91)
<ul style="list-style-type: none"> ワークショップの内容について自分が十分理解すること 	8.07 (1.50)	8.50 (1.35)
<ワークショップについて> <ul style="list-style-type: none"> 上記を踏まえて展開案が作成（ワークショップをデザイン）できること 	7.19 (1.25)	7.75 (1.24)
<ul style="list-style-type: none"> 展開案を基本として臨機応変にワークショップが運営できること 	6.93 (1.67)	7.50 (2.06)

「ソーシャルスキル演習」について、1期生と2期生の自己評価を概観すると（各項目の得点範囲は-1点～10点）、概ね中程度の自己評価をしているものの、2期生における「異なる意見の人にも説得力をもつ論理的な構成について検討すること」という項目の平均が3.65 (SD=2.38)とやや低くなっている。なお、当該項目の中央値は5であるが、-1～3の評定をした者が46.7%おり、説得力や論理性について課題を自覚する学生が半数近くいたことがわかった。

「ワークショップ演習」の自己評価についてみると（各項目の得点範囲は0点～10点）、1期生と2期生の自己評価には同様の傾向があることが伺える。授業目標について、比較的高い達成感を得ていることが伺え、特に、「ワークショップの内容について自分が十分理解すること」という項目の平均は1期生、2期生ともに8点を超え、全項目の中で最も高い自己評価となった。一方、

「展開や組み立てについて、複数の参考図書・資料で検討すること」という項目の平均はともに 4 点台であり、全項目の中で最も低い自己評価となった。もちろん、これらは自己評価であるため、客観的達成度と必ずしも一致するわけではないが、2 年連続で達成感の低さが示されたことから、次年度に向け、授業に含める当該要素について具体的な改善策を検討する必要がある。現状では、ラーニング・コモンズ内に 20 タイトル程度のワークショップ関連の参考図書が排架されているが、これについての周知をより強く行う、あるいはワークショップの企画書に参考図書を記載する欄を設けるなどといった対応が挙げられるだろう。

前報³では、1 期生における「ソーシャルスキル演習」の自己評価と「ワークショップ演習」の自己評価との相関を検討したが、それに倣い、本稿では 2 期生における両授業の自己評価の相関を算出した。その結果、2 期生が 2 年次に受講した「ソーシャルスキル演習」における「出てきた意見について、複数の視点から議論すること」、「異なる意見の人にも説得力をもつ論理的な構成について検討すること」、「プレゼンテーションの内容について自分が十分理解すること」という 3 項目の評定値と、3 年次に受講した「ワークショップ演習」における「展開や組み立てについて、複数の参考図書・資料で検討すること」の評定値との間に有意な正の相関が示された ($r=.33\sim.36$)。先述したように、「ワークショップ演習」における「展開や組み立てについて、複数の参考図書・資料で検討すること」は、1 期生、2 期生ともに最も低い自己評価をした項目であり、現状では達成感を得にくい項目であるといえる。そのような中、当該項目とソーシャルスキル演習との関連が一部示唆されたことから、解釈に限界はあるものの、ソーシャルスキル演習において、受講生が多様な視点を持ち論理的な構成について検討するスキルの向上を実感することが、ワークショップ演習の授業目標達成の質を高めることに繋がっている可能性が指摘できるだろう。

IV. 授業の効果と今後の課題

前回の分析結果からは、「事前の話し合い」を丁寧に行うというスキルは他の科目、特に AL80 となるようなグループワークや現地活動等を中心とした科目においては効果的であることが示唆された。今回の分析からは、議論や論理構成の必要性を評価した受講生が、特に参考図書・資料の検討の重要性を認識していることが示されたといえる。

しかしながら一方で、この「展開や組み立てについて、複数の参考図書・資料で検討すること」における自己評価の低さについて考察するならば、「ワークショップ演習」は全 8 回の演習のため、演習課題であるワークショップの企画・運営に関してのグループワークが中心となっており、各受講生が参考図書・資料を検討する時間が確保できていないという可能性がある。これを改善していくためには、授業の構成を見直す、または単位数を増やしてワークショップの理論や事例についての講義を行う時間を確保する、あるいは 3 年次必修の「地域プロジェクト演習」のための時間との

バランスをとるために、履修年次を前倒しするなどといった、授業そのもののあり方についても検討していかなければならないだろう。

なお、今回の分析にあたっては「ワークショップ演習」の中でもコミュニティデザイン学科の受講生のみを対象としたが、これ以外にもAL80となるような、あるいはグループワークを中心的な活動と位置づけているような授業はあるため、今後は他の授業との関係についても検討していくことが望ましいと考えられる。また、今回も「ソーシャルスキル演習」と「ワークショップ演習」における受講生の自己評価の関連のみを取り上げたが、「ワークショップ演習」自体の今後の課題としては、同一メンバーによる「慣れ」もあり得ることから、グループ分けや実施日程を検討した上で質的・数値的分析を行っていく必要があるだろう。今後も継続して調査していきたいと考える。

-
- ¹ 宇都宮大学地域デザイン科学部は2016年の設置当初より、「専門科目は100%アクティブ・ラーニング」を謳っているが、総授業時間数の10~30%がアクティブ・ラーニングとなっている科目を「AL20」、総授業時間数の30~60%の場合を「AL50」、総授業時間数の60~100%の場合を「AL80」と分類し、シラバスに明示している。今回教育実践として報告する「ソーシャルスキル演習」「ワークショップ演習」は、その中でも最もアクティブ・ラーニングの比率が高い「AL80」として位置づけられている意欲的な科目である。
 - ² 白石智子、若園雄志郎、桑島英理佳「地域デザインに必要なソーシャルスキル養成科目の実践と課題」(『宇都宮大学地域デザイン科学部研究紀要「地域デザイン科学」』第3号、2017、pp79-86)。
 - ³ 若園雄志郎、白石智子「地域デザインに必要とされるスキルの養成に関する複数科目における実践 「ソーシャルスキル演習」と「ワークショップ演習」を通じて」(『宇都宮大学地域デザイン科学部研究紀要「地域デザイン科学」』第5号、2018、pp109-115)。
 - ⁴ 自己評価にあたっては、その評定値の高低が授業成績に反映されることはないことを、両科目において受講生へ説明している。